Friend

Project

12

Authors:

阿部優衣	4
尾形美帆	5
堀内康資	6
渡辺祥子	10
小沢直史	11
清水勇人	14
金藤達紀	15
山本奨	16
守谷未緒	18
金子亮	19
萩原沙織	20
金亨哲	22
本澤真綾	23
安齋春菜	25
水野佑香	26
重田俊平	27
山崎紗也加	29
川又友輔	30
山崎杏佐子	31
海老沼蒼生	32
吉田万裕	34
宮廻杏奈	35
桑田恵理華	36
吉川春香	38
宗香里	41
笠間佐和子	42
保利小百合	44
桂竜馬	49

Prologue

– 塩原ゼミとは。

4th Abe Yui

与えられないもの

「Friends Projectを通して、塩原ゼミとして生徒たちに与えることができるもの」

2年間、ずっと、この命題に悩まされてきた。

昨年度の春、何も分からないまま初めて鶴見のABCラウンジへ向かった。
「とりあえず」勉強を教えた。生徒が勉強をしないでただ日常の愚痴やアイドルの話を聞いているだけの日も多く、なんだか「何もしていない」気がして、焦った。
それでも、土曜日の夕方に鶴見駅に立つ瞬間に感じる焦燥感は、夜には楽しかったという気持ちだけでいっぱいになり、また次回生徒に会うことが楽しみで仕方なくなっていた。

今年度の春、勉強を教えていた生徒たちは高校に進学した。
鶴見区と「居場所づくりプロジェクト」を始めることになりゼミ活動の広がりに期待した。しかし、ゼミでの毎週の議論は昨年度よりもスムーズには進まなくなった。
「私たちは生徒たちにとって何ができるのか？
と考える度に議論は行き詰まる。
勉強以外の「学び」ってなんだろうか。毎月の企画では、どのような形の「学び」を与えたらよいのだろうか。同じ議論の繰り返しだった。

自身が企画担当となった10月のよこはま国際フェスタでは、生徒たちにより良い「学び」を得てもらうために、ワークシートを作成した。けれども、あまり真剣にワークシートに取り組まない生徒たちに再び焦燥感を覚えた。
そしていつの間にか「私たちは何も与えることができない」という不安で土曜日の夜を終えて次のゼミで議論をすることが怖くなっていた。

そんな時に、生徒はなぜ土曜日にわざわざ時間を作って、参加してくれるのかを考えた。
そして、ふと昨年度鶴見に行っていた自身の動機を思い出した。
「また次回生徒に会うことが楽しみ。」
それだけである。
生徒は私たちから「学び」を得ることを望んでいたのだろうか。生徒に「学び」を与えなければならない存在として長い間勝手にプレッシャーを感じていた自分を恥じた。

私たちは単純に、居場所を与えることはできない。
居場所は、出来上がっていくものだ。時間をかけて人と人との関係の中で、たとえ意図しなくても。

特別なことなんて何もないかもしれないけど、ただそこにあって、ただ行くと楽しいと思える場所。
そんなものを、2年の時を経て、生徒とこのゼミは、私に与えてくれた。

5th

Ogata miho

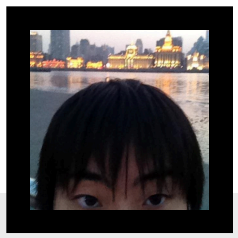
「Friends Projectで私達が与えたもの、（生徒から）与えられたもの」

夜。
思いを静かに馳せるとき。自分の内なる声に耳を澄ませて、自分と対話する時間。
それがいかに重要かをこの活動を通して学んだように感じる。

　塩原ゼミのやり方は、私が今まで身につけようとしてきたやり方とは大きく違った。
対話というよりむしろ、対案によって議論をして、効果的に結果を出す。短期間で、なるべく無駄なく理論を組み立て、それを相手にうまく説明する。それもそれで大切だろうし、それは間違いなく誇れる能力だ。でも、一年このゼミで過ごした今ならこう言える。「それも大切だが、それしかできない人は、きっと人生どこか大切なものを見逃してしまうだろう」と。人生に無駄なことは何もないというが、「無駄だから」といって自分から拒絶してしまう人にとっては、それは本当に無駄なものになってしまいうる。

　私たちはFriends Projectを通して、何か大きな結果を残すことはないだろう。でも、私たちがそこにいたという事実は残り、真剣にその場に向き合ったという経験は残る。そして、それを共に分かち合った仲間と中学生がいることも変わらない事実だ。たとえ彼らが、そして私たちが将来どうなるのか誰にもわからないとしても。

　私たちのゼミ生と中学生の繋がりは、少し特殊かもしれない。社会には大人の事情というやつなのか、世間体や所属がコミュニティーを決め、生活する空間を決めるという暗黙のルールがある。私たちは知らず知らずのうちにそのルールを学び、「社会化」されてきた。慶応義塾大学に入学した私たちなら誰もがそれをよく自覚している。ルールの中で上手く立ち回る方法を身につけて、器用に生きていく人が大勢いる世界だ。でも、私は一つ思う。この経験を通して、私は社会のそういったルールを客観的に、批判的に読みとれるようになった。自分たちの立っている場所を批判的に捉えられるようになり、その立場の危うさにも気づいてしまった。良くも悪くも。鶴見よる教室という場所は、そのルールとは一戦を画したところで、一対一で本当に相手と向き合って、対話を試みるという機会を与えてくれた。それは、社会化されてきた私たちを強くしてくれるだろう。それは彼らが私に与えてくれた大きな気づきであって、私の中に残り続けるだろう。私たちは彼らに何を与えたか？正直、何かを与えたと断言することは今の私には難しい。私は思うに、彼らに私たちが与えうる最大のものは、「彼らが受験勉強の知識をすべて忘れ去った後でも残っている何か」なのだろう思う。それを私たちが彼らに与えたか、それは今はまだ誰にもわからない。それこそ、長期的にみて彼らの可能性を一緒に探るということの意味なのかもしれない。

5th  Horiuchi Kousuke

FP報告書「私たちがあたえたもの、あたえられたもの」

だれかと出会うのは、とてもめんどくさいことである。誰でも新しい人と出会うとき、それなりにコストをかけている。徐々に違いを接近させていくめんどくさい過程を経て、それなりにラクな距離感というものを築いていく。

FPでの出会いは、日常の出会いとは根本的に異なっている。そこでは、常に「他者性」が自覚されていなければならない。他者であることを忘れようとする過程が「日常」であるとするならば、他者であることを再発見し、それに苦しみ続けることがFPの本質なのかもしれない。

そんな「非日常」に突然放り込まれたのは、去年の５月のことだった。外国につながる子どもたちとの出会い―それは身構えていたよりは「普通」だった。日本語も通じる、携帯も持っている。こんなやつ中学の時もいたなーって。そんなことを考えながら、ただ淡々と勉強を教えようとしていた。「自分は大人しく授業受けてたなー。こういう友達もいたけど」。自分の昔と比較する。「よくいるよね、こういう子」。そこに見えた違いは、自分の過去の「日常」に照らし、すり抜けていく。相変わらず勉強は進まないが、逆にそれくらいしか心配せずに、夏休みに入った。身構えていた「非日常」は、いつの間にか日常になっていた。

しかし、その日常への違和感は感じ始めていた。半年の活動をまとめると、どうしても身構えていた自分と今の自分との違和が浮かび上がってくる。ゼミ生みんなで延々と話し合った。彼らとどう向き合っていくか。そして生まれた一つのコンセプトは、とても曖昧なものだったと思う。しかし、それをそのままにしておくことは、曖昧で答えがないということをもう一回自覚し、悩み続けて答えが出なかった、そんな苦しみを書き記しておくために大切なことなのかもしれない。そんなことも考えていた。

後期、受験という関門が近づいてきた。彼らがいくら逃れようとしても、先生から、クラスメイトから、そして夜教室でゼミ生から、嫌でも意識せざるを得なかったに違いない。一方で、ゼミ生にも選択の時期が迫っていた。そんなことも予想したコンセプトだし、とにかくやってみるしかなかった。

受験指導にシフトすべく、いろいろとやり方を変えた。受験というどうしようもなさにどうしようもなく対応したまでである。それは事実だろう。しかし、それ以外のことを考える余裕がなくなったのもまた事実だ。

彼らにあたえたもの、あたえられたものは同じものだ。一緒に気づいたことだと思う。人は、人のことを気にかける余裕なんて、そんなにない。いろいろ考えられたのは余裕のある時期だったから。この活動をしているのも、親にお金を出してもらい、有名私立大学というステータスにある、そんな立場にいるからこそなのかもしれない。彼らのことを支えきれなかった。だから彼らは勉強をはじめたのかもしれない。

この先自分で生きるようになれば、マイノリティのことなど忘れてしまうだろう。それはしょうがないことだ。残酷だが、彼らから最も遠い人しか、彼らに寄り添うことはできないのかもしれない。それでも、あやふやな時期に出会えた私たちは、ふと、彼らのことを思い出す時があるはずだ。それが最も真摯なのではないか。それだけが、決して「偽善」になりえない。

彼らは他人だ。私たちは決して彼らではないし、彼らも決して私たちではない。仕事終わり帰り道、もう真っ暗になった夜の道で、すべてが虚しくなる瞬間。そこで輝くのが今の経験なんだろうと思う。

塩原ゼミとは。

塩原良和研究会(以下塩原ゼミ)は、2008年度秋学期に慶應義塾大学法学部政治学科に開講した今年で６年目をむかえる、国際社会学を研究対象としている研究会です。

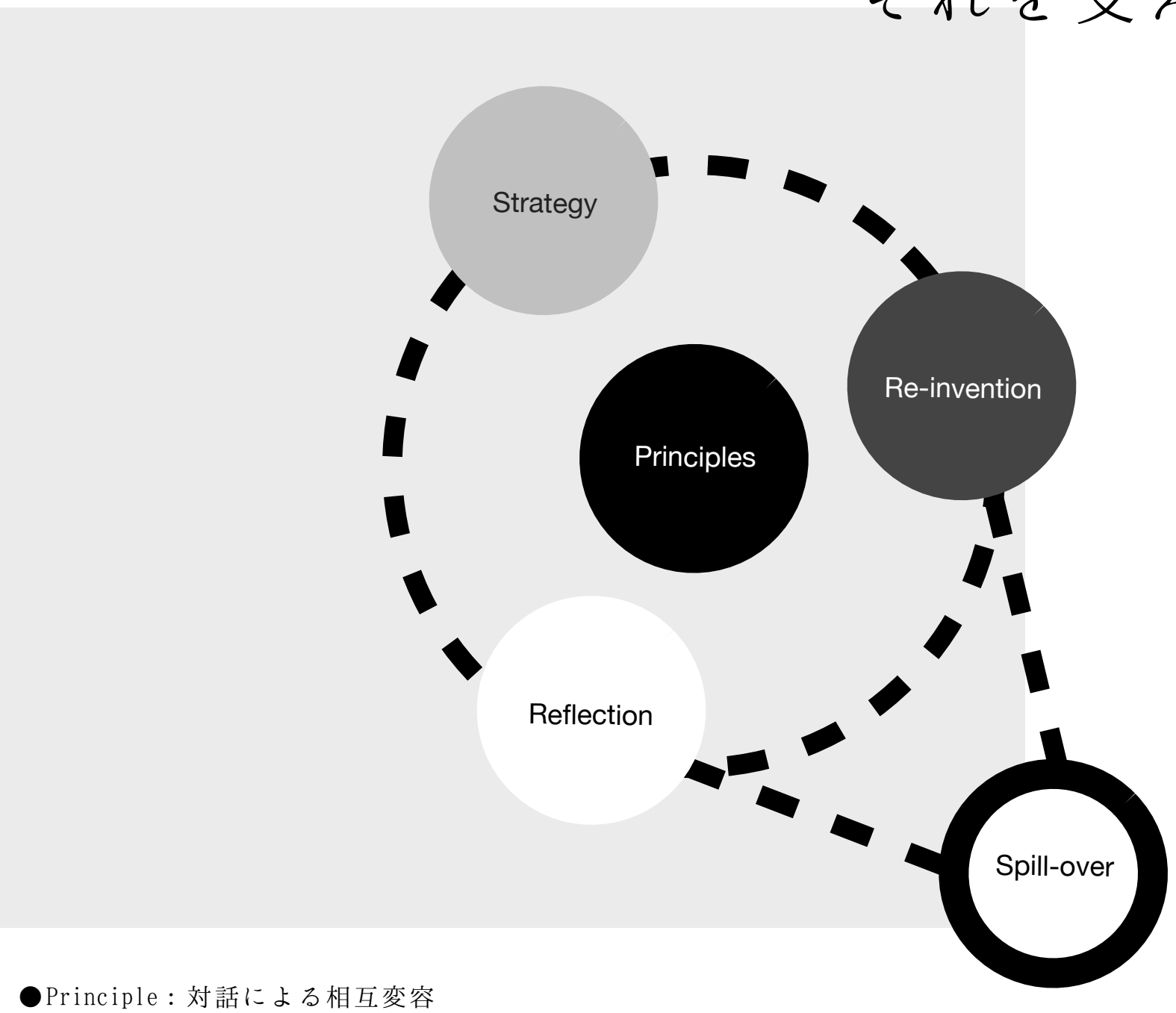
2012年度は、留学中のゼミ生も含め、4年生14人、3年生17 人で活動しています。卒業論文は個人で執筆するため、ゼミ生ごとに異なった研究をしていますが、31人の共通して関心のあるトピック「多文化共生のあり方」についてです。

文献輪読や、外国にルーツを持つ人々へのインタビュー、三田の家や鶴見夜教室でのの共同実践を企画するなどの、机の上で終わらない学びを大切にしています。

社会学を行う場。それが塩原ゼミです。

フィールドワークの場として、慶應義塾大学のすぐそばに佇む三田の家と、鶴見、川崎を中心に学習教室に参加しています。私達のフィールドワークについては、次ページへ。

Friend Projectのビジョンと
それを支える体制



●Principle：対話による相互変容
外国につながる子どもたちと塩原ゼミの大学生と教員が、それぞれの自己についてより深く考え、お互いの人生について想像する感性を磨き合う。そして、それぞれのやり方で自分の思いを表現する方法と喜びを分かち合う。

○Strategy：協働とつながりの促進
Principleを達成するために、このプロジェクトに関わるすべての人々のあいだに、このプロジェクトが終わったとしても続いていく「協働とつながり」を創りだす。そのために、「鶴見国際交流ラウンジ」「三田の家」を拠点に、それぞれの具体的なGoalを設定してさまざまな実践を行う。

○Reflection：省察
塩原ゼミの大学生と教員が、このプロジェクトの遂行を通じて川崎・鶴見の外国人住民の状況をより深く知り、このプロジェクトのPrincipleやGoalが間違っていないか、常に考え、議論し続ける。

○Re-invention：プロジェクトの再創造
今年度のプロジェクトの成果や課題、関わった人の思いを、来年度のプロジェクトに伝える仕組みづくりをする。

○Spill-over：変革に向けて
ゼミ生をはじめ、このプロジェクトに関わった全員が、それぞれの人生で、それぞれの場所でやるべきこと、無理なくできることを、続けていく鶴見・川崎の地域社会における外国人住民をめぐる状況に、良い方向の変化を起こしていく。

Tsurumi Yoru Kyoushitsu

- 見つめる夜。

5th Watanabe Shoko

「ことばに表せないこと」

5 期　渡邉祥子

ことばに表せないことを感じる。

私が人と向き合う時にいつも大切にしようと心がけていることである。それは、口に出して話すことばが有るかどうかは全く関わらない。何を考えているか、何を思っているか、何を感じているかということを、創造して考えることである。直接ことばを交わしていなくても、相手から溢れる「何か」を見たり聴いたり肌で感じたりすること。その空間の空気の変化を感じること。完全に理解することが不可能であっても、一端でも分かろうと努力すること。その行為があって初めて、様々なことばの重みが実感されると思っている。

それは、常に意識していることであると同時に、私が音楽に惹かれる理由でもある。演奏している人の真剣な顔付き、苦労の様子、楽しんでいる様子、余韻、音そのもの。そのような人の集まった全体での音、雰囲気。耳を傾けて聴いてみると、例え譜面は同じでも、同じ演奏は一度もないことに気が付く。伝えたいことが明示されて伝えられているわけではないのに、何かが伝わるような気がする。ある人が漠然とした不安のようなものを抱えていても、一瞬だけその不安を忘れる時間。演奏会が終わった後は、寧ろ前を向くように後押しされたような気持ちになる。勿論、何も感じない人もいる。ことばに表せないことは、受け止められ方も千差万別なのだと思う。

私は 1 年間よる教室に関わってきて、ある時は遊び、勉強し、他愛もない会話をし、その中でどうしようか悩んだり、楽しくて笑っていたりするうちに、実はことばに表せない感覚を、子どもたちやゼミ生と過ごして知らず知らずの間に感じられていたのではないかと考えるようになった。よる教室へ通う子供たちの中には、よく分からないまま突然日本にやって来て、はじめは日本語が分からなかった、しかし今こうして中学校へ通い、勉強しようとしている子がいる。そのようなことに対して、ひとりの人間として尊敬せずにはいられない。また、集中モードに入った時の静けさは、驚くほどである。私も、時間が無いとか忙しいとか言わずに頑張らないといけないと思う。一方で、学校や家でのことを話す時に見せるさり気ない表情や、黙っているという事を通じて伝わってくる空気感から、哀しさや淋しさや不安を感じているのではないかと気づかせてくれることもある。常に様々な感情が交じり合っている空間に私はいるのである。この感覚は、生きてきた年数やバックグラウンドに関わらず、等しく共有されているものであるだろう。そして、私もあの場所に関わっている身として、一緒にいた時間を通じて何かを感じてもらえたのではないかと信じている。それが、よる教室という場所で提供できたものであり、提供されたものである。

よる教室／つるみ国際交流ラウンジ／学習支援／外国／受験／可能性／拡げる／るんるん

これらは、単なることばであり、枠組みに過ぎない。土曜日の夕方から夜、あの場所で起こった出来事全てが、得たことであり与えられたことであったのだと思う。そのように考えると、本当に多くの感覚があの場所から生まれたはずである。私にとっては、よる教室のあった土曜日の夜は、良い疲れをもたらす‘夜’である。

塩原ゼミに入ってから、文献で学ぶことの先にあるリアリティーを、という思いでフィールドワークに臨もうと考えていた。しかし、それを意識するのは難しく、違和感しか感じなかった。文献で学ぶことの先にあるリアリティー、というのは紛れもなく、私が普段生きる生活そのものに過ぎないのだと思う。特別に何かを学んだり、教訓めいたものを得ようとしたりするのではなく、自分と同じように日々悩みながら混沌としながら、時に笑いながら暮らしている人間と一緒に同じ時間を過ごすという生の現場そのものを大切にしていきたいと思う。そして、その中で、ことばに表せないことを感じる経験を、沢山していこうと思う。

5th Ozawa Naofumi

「彼ら」から「彼」へ。「彼」から「僕ら」へ。

5期小沢直史

右も左もわからないような状況から、文字通り手さぐりで始めたFriends Project一年目が終わろうとしている。最初は「外国につながる子供達」という意識が強く、色眼鏡をかけたような考えをすることが殆どだった。「彼らはどんなことを日々思っているのだろう
「彼らはどのようなバックグラウンドを持っているのだろう」「彼らは今後どのような人生を送っていくことになるのだろう」…当初は、疑問に思うことなくそのような事を真剣に考えていた。

そこに違和感を覚え始めるのには、そう時間はかからなかった。子供たちのことを「彼ら」と僕らは言うが、そんな「彼ら」にも一人一人全く異なるバックグラウンドがあり、環境があり、生活があった。振り返れば、自分自身も「帰国生」として一般化されることに強い違和感を持っていたし、時には嫌悪感すら抱くことさえあった。それなのに、子供達をひとえに「彼ら」・「外国につながる子供達」と一般化してしまうことは誤っているのではないだろうか。このような疑問を抱いたのは僕だけではなく、夏休みに入り同期のゼミ生一人一人と時間を作り対話すると、同じような意見を持っている人が多かった。

後期からは同じ活動をしている同期内でとことん話し合うことを徹底した。傍から見れば非常に非効率的な事をしていたことに違いない。90分ある時間を、まったりと、夜教室の子供達一人一人について実際に何をやったのか、気づいたこと感じたことをお互いに報告しあい、共有した。その結果、それまでは自分が見聞きしたり経験したことに基づき、子供達のもやもやとしたイメージを追っていたのが、子供達一人一人の輪郭がくっきりと浮かんでくるようになってきた。ここで「彼ら」ははじめて、「彼」になったのだと感じている。それ以降はいつでも子供達一人一人の顔を思い浮かべることができるようになった。きっと、このときようやく夜教室で、子供達一人一人と対話ができるようになってきたのだと思う。

「彼ら」から「彼」になったのち、僕らの信頼関係はさらに強まったように感じる。しかし、あまりにも「彼」への焦点があたりすぎると、背景にあるバックグラウンドが今度は逆に見えにくくなってしまうことに気が付いた。しかし、それは寧ろ当たり前なのかもしれないと今は思う。彼らが今、生きているのは日本の社会なのであって、通っているのは日本の中学校であり、直面しているのは日本の高校受験である。親しく接していて表に出てくる日常は、やはり日本に住む一中学生のものとさほど変わらないのだ。しかし、しっかりとした信頼関係を築いていれば、「彼」の方から差異を示してくれる。それは、将来母国に帰りたいという夢であるかもしれない。恋愛観なのかもしれないし、家庭環境なのかもしれない。いずれにせよ、彼らは、確かに日本人とは違うし、その違いが不利に働くことが少なからずある。今僕らはそれらを解決できているとは言えないが、しっかり受け止めることはできているのではないかと思う。

この関係性は、一朝一夕で築けるものではない。時間をかけしっかりと向き合ったからこそ、先生ー生徒という安易な関係性を超えた関係が今あるのだと思う。受験もあと少しで終わる。Friends Projectはあと一年ある。この一年で、じゃあ何をするのか、したいのか。僕は、「彼」と僕ら＝ゼミ生という関係から、「僕ら」という関係に変容し、活動していけたらいいなぁと漠然とではあるが思っている。

鶴見夜教室

鶴見夜教室には、２つの活動があります。3年生が主に運営するNPO 法人 ABC ジャパンと塩原良和研究会が協力して開いている学習サポート教室と、横浜市鶴見区から支援をいただいている地域を巻き込んだ教室です。毎週土曜日、午後 5 時から午後 8 時の間、どちらも鶴見駅前にある鶴見国際交流ラウンジの教室にて行なっております。現在、中学生も大学生も毎回 4～8 人ほど集まっており、親睦をふかめています。

3年生は生徒の英語や数学のテスト勉強、国語の授業から、高校入試に向けた面接練習をしています。 「外国につながる子供たちの可能性を一緒に探る場」というコンセプトのもと将来の可能性とは何なのかをふくめて、一緒に悩んでいます。 ただ勉強するのではなく、勉強後にはブレイクタイムをつくり皆でお菓子を食べたりゲームで楽みながら、勉強では探れなかった本人を探したりもします。

4年生のBIGBANGでは、受験や、座学による勉強にとらわれず、時にはレクリエーション企画や、慶應義塾大学のキャンパスツアーを行ない、「先生と生徒」という枠を越えて、大学生である私達にできることを模索しながらのびのびと活動しています。

今回の報告書のほとんどが、この夜教室からうまれた作文です。

ATARIMAE?

- 当たり前は当たり前ではないのが当たり前。

5th Shimizu Yuto

‘12FP報告書

「与えたもの・与えられたもの」という意識は私と生徒の間にはなかったように思える。

あの場は、一応「教室」と名のつく空間であった。しかし、あの教室を運営する上で「教育的視点」はそれほどなかった。

『私たちとの交流を通じ、彼らにどうなって欲しいのか？』

『彼らにどんなものを私たちは、与えたいのか？』

そういった視点は、私にはあまりなかった。（「視野を広げる」「選択肢をもってほしい」といった抽象度のレベルでならあったが、「視野を広がった状態／選択肢をもった状態って何？」という具体度まで落とし込んでそれに対する打ち手を打たなかった時点で、目標・教育的視点などなかったと私は考える。）

何かを〈与えるため〉の場所としては成り立っていなかったように思う。

そして生徒側からみても、何かを〈与えられる〉という意識は特になかった。

勉強をするための時間として、教室を抑えても、手ぶらできて「俺今日勉強する気はねーから！」と宣言してだらだらと過ごし続けることが頻繁にあった。

「じゃあ、お前ら何しにきたんだよ！」とよくいったものだが、彼らの中で明確な答えもなかった。

彼らにとって、毎週あの空間があって私たちがいてたまにどこかに連れて行ってもらえることは、とても自然な『そこにあって当たり前のもの』であって、我々なり区役所の方なりに〈与えられている〉ものではなかった。

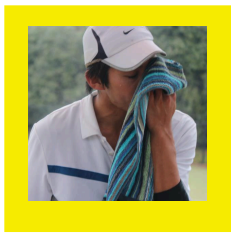
同期生にとってもあの場は「あって当たり前のもの」であった。「あの教室に行くときはトイレにいくように、当たり前にいく」という発言もあったほどだ。

「『夜』によって、与えられるものはなんですか？」

と問われても大抵の人はキョトンとするだろう。『夜』に与えられるものは実際多くあるが、夜なんてあって当たり前のものに、特別な意識をもたない。

相手になにかを与えるような意識はなかったが、生徒と大学生が共にもっているものを持ち寄ってあの「あっても当たり前」の空間/関係を一緒に創っていけたのではないかと思う。

4th



Kondou Tatsuki

鏡の中の自分

私はこのゼミに入り、Friends Projectと通じ、たくさんのことを知りました。
文献を読むことで得た知識や社会情勢ももちろん、それらのうちの一つでした。けれども、最も学び多かったのは、土曜日の夜という空間で自分達とは全く異なるバックグラウンドを持つ生徒達とふれあうことで出会った、そして、火曜日の夜という時間に日々のプレッシャーから解放された三田の家という場所で出会った、今まで気が付かなかった自分自身のことについてでした。

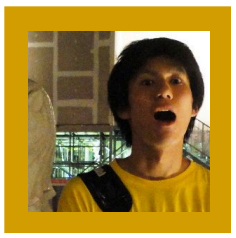
ゼミに入ったとき、私は自分のことを「普通の大学生」だと思っていました。
しかし、フィールドワークや三田の家などのFriends Projectを通じて、私自身の持つバックグラウンドが社会において決して「普通」ではないということを知りました。そして、私達が日頃「普通」だと思って、無意識に抱いている価値観の存在を、改めて見つめることになりました。

たとえば、鶴見のラウンジで中学生の受験指導をするうちに、生徒達が大学という存在すら十分に知らないということに驚きました。彼らは高校受験には向かっていたものの、必ずしもその先に大学受験を見据えているわけではありませんでした。このことから、私が一定の年になれば「普通」に大学に進学するのは当然だ、と思っていたのは、ごく一部にしか当てはまらないルートだったということに気付かされました。

そして、高校生とのBig Bangで様々なイベントを企画していく中で。日頃のラウンジでの過ごし方を考える中で。また、三田の家での時間についてだったり、プロジェクトに関して話し合う中で。
私達が日々、「目標を定め、その達成に向けて努力するべし」という価値観に如何に縛られているかということを感じました。
その価値観に逆らい、目標らしい目標がない中で何に向かって進んだらいいのかわからないまま、それでも突き進まなければいけない状況で、私達は急に焦燥に襲われ、自信を失い、モチベーションさえも揺らぐことが何度もありました。
その度に、その価値観の根強さを改めて思い知りました。

これも全て、Friends Projectがなければ知らなかったこと。
毎週、日頃の大学生活で関わる人々とは異なる生徒達、そして日々を生きる姿勢とは異なる心持で過ごす『夜』があったからこそ、知り得たことです。
その『夜』がなければ、私は以前のように自分について、たくさんのことを「普通」で終わらせてしまっていたと思うから。

自分の全てを、他人という鏡に映すことで、相対化して見つめ直す。
それこそが、私がこのゼミで出会った「鏡の中の自分」です。

5th  Yamamoto Susumu

FPで私たちが与えたもの、与えられたもの

5期　山本奨

悲観的。考えすぎ。それでいてすぐ結果を求める。

僕が鶴見でおこなってきたことを「ボランティア」とするならば、「僕ら一生徒」という関係は、僕がNGOや学生団体でずっとやってきたこととさして変わりはないんだろう。

孤児院に行く。子どもと触れ合う。「うわ、今日も何もできなかった」って言って落ち込みながら帰る。

今になって考えれば、「なにか与えること」が念頭にあったからこそ、孤児院の帰り道の僕はいつも憂鬱だったにちがいない。

鶴見であいつらに会って約１年。おいおい大丈夫かよってほど英語ができない奴がいまだにいるくらい、僕たちは何も与えられてない。

一緒に悩んだり、遊んだりしただけ。

そして孤児院の帰り道同様、今僕は振り返る。

「あれ、意外とたのしかったなぁ」

こうして振り返ってみて初めて、

「何も与えられなかった」ことを気にしていない自分に気がついた。

よく考えたら当たり前だ。

友だちと接しているとき、いつも「与えた・与えられた」なんて微塵も考えない。

でも僕たちは、ちょっとした「非日常」に出会うと、すぐ優劣や強弱や需要と供給を考えてしまう。

あいつらだって「外国にルーツのある子どもたち」である前に、ひとりひとりが日本に住む無邪気な中学生で、僕たちの友だちだ。

そう考えたら、なんだかいろいろすーっとした。

どうやら、僕たちがやっていたのはボランティアじゃないっぽい。

結論。

結局何も与えられてない。でも、「与える」を考えなくなった自分が少しだけ新鮮。

Tsunagari

– いつ私達はつながったのか。いつきれるのか。

4th

Moriya
Mio

「ひとりぼっちの夜」

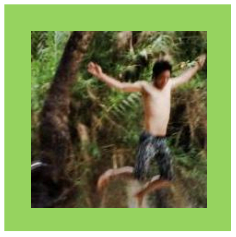
人生で初めてのひとりぼっちの夜は、思いのほかさみしさでいっぱいだった。何度寝返りを打ったのだろうか、込み上げてくる不安を追い払うことができずに、結局朝まで一睡もすることができなかったのをよく覚えている。このとき、私はひとりぼっちになることを初めて理解した。日本ではないところで、慣れ親しんだ人のいないところで生きていくということを。

決まりきったルールを1から丁寧に教えてくれる人はほとんどいない。日本とは違うちょっとしたこと、例えば文化や、言語のほんの少しのずれが、私をひどく不安にさせた。日本では感じたことのない、戸惑いで爆発してしまいそうな感覚。あぁ、もしかしたら、わかったつもりでいたのかもしれない。異国で生きるということは、こんな得体のしれない感情と付き合わなきゃならないのだろうか。あの子たちはずっとそうだったのか。

表面では、日本に浸りきっているように見えた夜教室のみんな。けれども、私の知らないところで、どれだけの眠れない夜を過ごしてきたのだろうか。自ら望み、選び取ったわけでもない地で、今も不安に駆られながら手探りで生きているのだろうか。初めて会ったころはあどけなかった生徒たちは、もう高校生になった。身長も伸びて、体も大きくなったけれども、その不安は消えることはないのだろう。生きていく限り、あのよくわからないずれに出会い、感じ続けなければならない。それを少しでも和らげたいと思って、大学生活最後のフィールドワークに臨んでいた。私がいない間に、同期たちは必死に悩んで、生徒たちに向き合おうとしていた。生徒たちの不安を取り除くことは、どんなに頑張ったとしても、私たちには不可能だ。それはよくわかっていたけれども、どうにかして生徒たちの力になりたかったのだ。そうして同期たちが作り上げたのが、今の生徒たちとの関係だ。中学生だったときと変わらず、表面上は明るく、元気な子がいた。同時に、それとは違って、口数が減ってしまって、ときどき何を考えているのかわからなくなる子もいた。大したことは教えられなかったけれど、生徒たちはたった1時間でも、30分でもあの部屋にやって来てくれた。

悩んで、また悩んで、そして悩んだ最後のフィールドワーク。私が生徒の力になれたことは多分なかった。ただ、どうしようもなく不安に飲み込まれそうになったときに、やって来られる場所になりたい。そういう場所を、後輩たちがこれから悩みまくって作ってくれるだろう。もちろん、私自身も悩み続ける。眠れない夜が少しでもなくなるように。

5th



Kaneko Ryo

FriendsProject報告書

5期　　金子　亮

「外国につながる子供たちの可能性を一緒に探る場」

これは夏合宿で決めた夜教室のコンセプトだ。正直言って今、この一文を見ると、こっぱずかしさというか、むず痒さのようなものを感じてしまう。「自分の強みってなんだろう」「自分は将来何がしたいんだろう。」僕らは自分自身に問いかけ続ける。自己分析と言う名のいわば自分の可能性を探る作業をひたすら繰り返す。いっそのこと誰か僕の可能性を一緒に探ってくれ。今はそんな気持ちだ。

　では、そんな僕らが夜教室を通じて彼らと一緒に可能性を探るって一体何だったんだろう。

高校なんて行く必要ないじゃん。と言われた時、僕らは何も言えない。それは僕らが受験に取り組み、圧倒的多数の人と同じよう高校に進学したから。僕らは中学を卒業し立派な社会人となって幸せな生活を送っている人の気持ちがわからないから。年齢も違う。ましてや彼らの家庭の事情がどうなっているかも全く想像がつかないから。

　それでも、学校の先生とも、親という立場からも言えない何かを伝えることができないことがあるんじゃないかと思った。

　僕が生徒と1対1で雑談をするときに、一つだけ意識して話していたことがあった。それは自分自身の高校生活の思い出をすることだった。高校のサッカー部の話、男子校という特殊な空間で発生する特異なエピソード（彼らは一人残らず拒否反応を起こしていたのだが）、ちょっとだけ高校時代の恋愛話など、彼らが高校生活って楽しいんじゃないかと感じてくれればという思いからだった。

　それぐらいしかできなかった。自分も可能性が広げようと思って高校進学したわけじゃなかったから。だけど毎日が充実していて、今思えば学ぶことがすごくあった3年間だったから、今勉強がいやだという理由で、そこで体験できる3年間の可能性を捨ててほしくないと純粋に思った。

「テスト帰ってきた！〇〇点だった！。」

ある生徒がFacebookに投稿していた一文だ。

自宅のパソコンでこの投稿を見た時、僕は思わずにやけてしまった。

僕らはみんなで話し合いをしながら「あいつらちゃんと勉強やってるかな。」と思いをはせる。

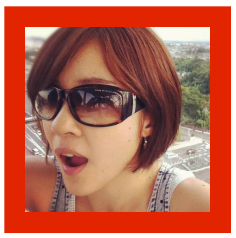
彼らは勉強を頑張っていい点数とった時に、「よっしゃ、あいつらに成績自慢してやろっ！

ときっと思っている。

夜教室、受験勉強を通して、慶応大学に通う20過ぎの大学生と、鶴見区の中学に通う15歳の彼らが「つながりが持てたこと」これが僕らが与えられたものであり、彼らにもしかしたら与えられたものなんじゃないかなと思う。

彼はきっとゼミ生からのいいね！や祝福のコメントがほしかったのだろう。

僕は、塩原ゼミの同期のみんなと同じようにいいね！を押した。

4th  Saori Hagiwara

新しい自分

萩原沙織

正直、テーマである「夜」という言葉にそこまで思い入れがない。去年参加していた「夜教室」と同じ時間帯にも関わらず、今年は「BIG BANGとして活動していたからだ。ただ、私の中で夜という時間は一日の終わりを意味し、ため息とともにその日の疲れと達成感／反省の感情に自然と包まれる。例えば、20時ぐらいにBIG BANGを終えた後の家までの帰り道の45分弱は、さっきまで騒いでいたのが嘘かのように、こう見えてぼーっとBIG BANGについて考えていたりもする。その時間は大切だったんだなあとBIG BANGの終わりが近づくにつれて強く感じる。

自分が２年間生徒達と一緒にいて、与えられたことは、正直本当にまだ分からない。ちょっと書く事に困って去年の報告書を覗いてみたら、「ゼミに入るまでは『２年間のFW』と思っていたけれど、生徒達も私達も変わりゆく環境の中で生きていて、FPが一区切りついても私達の関係に終わりはない。そして、何年も経って振り返ってみてやっと、自分たちの行なったことがお互いにとってどうだったのか、その答えがなんとなく見えてくる気がする」と書いていたのだが、一年前と私の思いは変わらない。たぶん、数年経って、生徒達も私達ももう少し大人になって、ふと感じたり、分かったりすることなのかな、と今は思う。

逆に、BIG BANGで活動し、生徒達に教えてもらったというか、気付かせてもらったことは多くある。その中でも話していないことを書こうと思う。自分のやりたいことを思う存分にやっている、沢山の素敵なゼミ生に囲まれる中で、特に大学生活で何も打ち込んでいなかった私はどこかで皆を羨望していたし、「自分はどうせ」って心のどこかで思っていた。バイトして飲み会に行くだけだった。でも、そんな私が授業中に「土曜日は16時までバイトして、そのまま鶴見に行くのがルーティンとして自分の中で出来ている」って何の躊躇もなく言っていて自分でも驚いた。「あれ、私ってこんな人だったっけ？」と。「高校生の居場所づくりプロジェクト」なんていう、大変立派な名前を持った事業だったが、その上から目線な名前とは裏腹に、私は生徒達のおかげで新たな自分に気付けたのである。入ゼミ前はこんなこと予想もしていなかった。

あと、もう一つ改めて気付かせてもらったことは、先ほども書いたが、人と人の関係は一生続くこと、終わりがないこと、だ。もう私のゼミ生としての活動は終わってしまうが、出会った生徒達との関係も終わる訳ではない。活動中の２年間ずっと答えがでなかった「自分達がどういう存在なのか」「何を与えられたのか」を、終わりのない生徒達との関係の中で、少しずつ解明できたらな、と鶴見からの帰り道にふと思ったりするのである。

Reflection

ー省察、熟考。自分を反射する、鏡。

4th Kim Hyongchol

「神様は降りてきませんでした。それでも筆をとらなければいけないのです。

４期　金 亨哲

筆を取り始めてからなにを書こうか、たまにあるアイデアの「神様」が降りてくることを毎回、期待して文字を打つスタイルの僕ですが、「Friends Projectで私達が与えたもの、（生徒から）与えられたもの」というお題をもらって、正直なところ、ものすごく困っています。与えたものなんて、与えられたものなんて明言化できるわけがありません。与えられるものの小ささに悩みました。与えたものの先を観る勇気もありません。「このまま」の「これから」なんてとっくに知っていて、その通りになっていくとしたら「与えたもの」はなんて「間抜け」な言葉でしょう。今年度のプロジェクトは色んな意味で簡単では無く、簡単に言葉にすることをためらうものばかりでした。2012年度のフレンズプロジェクト、塩原良和研究会４期に与えられたのは「居場所づくり」と言う言葉です。

去年、僕らの前に現れた「対話」とか「議論」とか「想像力」と言う言葉はものすごく親切なものたちでした。この言葉を巡って話し合う中で、自然と相手を「想像」し「対話」を重ね、時には「議論」を白熱させなきゃいけなかったからです。僕らの中にひとつの「定義」をつくっていくためのそんな時間が心地よかったことを覚えています。今年、現れた「居場所」と言う言葉、まったく逆の性質でした。「居場所」って言葉はひとりひとりの価値観に依存します。個の譲れない部分が「居場所」を創りあげています。ふと、思います。「居場所」は与えられるものじゃなくて、自分で創り上げるものだ。多分、これは正論です。事実、僕も、この僕だって日本に生まれた「マイノリティ」であることを、武器にして自分の居場所を創りあげているのでしょう。じゃあ、「居場所」を創り上げる力が無い人は、創り上げる選択肢を持たない人はどうするのでしょう。

2012年、秋の夜、時刻は12時過ぎ。飲み会の帰りでした。最寄り駅のホームで電車を降りて階段へと歩を進める僕の目の前で見慣れた、黒いジャージ姿でシルバーのアクセサリーをジャラジャラとつけている、他の人より2つくらいは顔の位置が高い男の子の姿がありました。高校1年生の彼とは高校受験の前には毎日顔を合わせていましたし、見間違えるわけがありません。合格したあと、「ありがとう」と真っ先に電話してくれた時はものすごく感動しました。こちらに気がつくと煙たそうにイヤホンを外しながら「よっ」と会釈をしてきます。こんな遅い時間になにやってんの？と僕。「遊んでた。帰りたくないから、遊ばない？」と彼。普通（ところで普通って一体なんなんでしょうね）の高校生だったら、多分、早く帰れとか、少し強い口調で叱っていたかもしれません。でも、彼の家庭の事情も少しは知っていて、帰りたくない理由もなんとなくわかってしまったので、あんまり強めに言えませんでした。

その彼のことが近頃、4期生の中で話にあがります。心配だという話らしいです。ドラッグとかに走らないだろうかという話題すらあります。さて、僕はなにを彼に与えられるのでしょう。与えてもらっているのは、無力感です。居場所ってなんなのでしょう。肯定される空間、存在を許される空間、そんなものが彼にあったらそれは「居場所」と呼べるのかもと思いを巡らせます。多分、彼には肯定が足りていません。彼になにを与えられたか、「神様」はいつも降りてこないけど、それでも何かを与えたいと想い続けるのです。そしたら、いつか、彼の前に「神様」が降りてこないかなと密かに思いながら…

4th Honzawa Maya

「FPで私達が与えたもの、（生徒から）あたえられたもの」

塩原ゼミ４期　本澤　真綾

毎週土曜夜、鶴見国際交流ラウンジ。私たちは外国にルーツを持つ生徒たちに対し、一体何を与えられたのであろう。何も与えず、何も与えられず。それが一番的確であったように思う。勉強を教えようにも、工業学校での専門的な勉強を私たちに教えられるはずもなく、一緒に頭を悩ませ、難しい漢字に振り仮名をふるくらいが精一杯であった。この１年間、高校生居場所づくりプロジェクトにおいて、ずっと考え続けてきた。私たちはあの子たちのために何が出来るのか。「学ぶ・つながる・広がる」というコンセプトを定め、子供たちにとって、人生の学びとなり、かつ狭いコミュニティの中で完結することなく、外の世界とのつながりを持てるような、そんなプロジェクトにしよう！と意気込んだ時もあった。だが、私たちの思惑とは裏腹に、言葉だけが上滑りし、生徒たちの反応はいまいち、数はどんどん減っていった。私たちは彼らに「何も与えられていない」。その感覚が何より苦しかった。知らず知らずのうちに、私たちのやっていることには意味がある、という達成感を必死で探し、肯定して欲しかったのかもしれない。「彼らのために」という小さな満足感にすがっているのかもしれなかった。もやっとした手探りの中で進んでいくこのプロジェクトには絶えず思考を巡らすことが求められたが、やっている中での疾走感や高揚感は感じることができなかった。

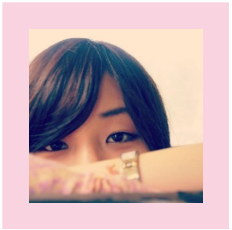
もやっとした私たちのプロジェクトに最後まで足を運んでくれた生徒もいた。中学生の時から付き合いのある３人の高校生たちだ。逆に考えれば、何故、何を考えて彼らは毎週土曜やってきていたのであろう。文字通り、合理的に考えれば、この時間ラウンジに足を運ぶことにあまりメリットはない。なのに３人の生徒はほぼ毎週、やって来た。勉強用具も何も持たず、３０～４０分遅刻してやってきて、毎週対して変わらないＡＫＢ48の話をしたり、彼女に振られた話をしたりして、帰っていく。私たちは彼らに何も与えられず、また逆に、彼らは私たちに小さな達成感を与えてくれることもなく、それでもかろうじて、毎週土曜夜教室という空間は存続した。なんとも不思議な空間であった。

今振り返ってみても、もっと彼らのためにできたことはあっただろう、もっと教えてあげられること、もっと伝えてあげられることがあっただろう、と思うことはたくさんある。忙しい時間の中で、居場所づくりプロジェクトに割いた時間が全て彼らのためになっていたとも言い難い。だが、このプロジェクトに何か意義を見出すとしたら、「彼らのために何かをしてあげる」という考えから自らを解放する経験であったのかもしれない。よく言えば、需要と享受の関係ではなく、メリットデメリットの関係でもなく、それでも緩く繋がっていられるような、そんな関係。悪くいえば、いつ切れてしまうかもわからない不安定な関係。だが、そのような状況で１年間彼らと繋がっていられたこと。それが一つの価値であるのか、とまた私はこのプロジェクトに何らかの達成感を見出そうとしている。

Mokuteki

あってもなくてもいい。でも、今はない方がいいのかもしれない。

5th



Ansai Haruna

『10/6(土)夜、私たちと子供たちの居場所』

塩原研究会５期　安齋春奈

私たちと子供たちが出会った春から時は経ち、今子供たちの受験が目の前に迫っている。
この報告書を書くにあたって、今までのフィールドノートを読み返してみた。
ゼミの活動だから、と始まったこのフィールドワーク。
正直言うと、夏休みが始まる前までの間、私は何も分からないまま、
ただなんとなく、ただやらなきゃいけないという義務感で、ただ動いていたような気がする。
それが今となっては、このフィールドワークという空間も、
私たちゼミ生を繋ぐ、大切な根幹を担う存在となっている。

『外国につながる子供たち』の可能性を一緒に探る。

それが、私たち５期生がこのフィールドワークにかける想いである。
転機になったのは、夏合宿。
それぞれに抱え込んでいた本音を吐き出した。
「私たちは子供たちにとってどういう存在なのか。」
「子供たちにとって、“鶴見よる教室”とはどういう場所なのか」
「私たちは子供たちに何が出来るのだろうか。」
これまで、表面的にしか話し合ってこなかったことを、
ゼミ生一人一人がきちんと向き合い、何時間も話し合った。
　――『外国につながる子供たち』の 可能性を一緒に探る。
これが、私たち５期生が出した答えである。

でも、ひねくれ者な私は、何時間も話し合って出した答えにも、
この言葉を導いたことに満足しているだけなんじゃないか、
なんて気持ちも、なかったといえば嘘になる。
すっきりしたような、してないような、
そんな中途半端な気持ちで向かった後期初めてのフィールドワーク。
それが10月6日夜である。
しかし、そこにあったのは、子供たちの変わらない笑顔と、
これからの受験に不安を抱えつつも、真剣に向き合っている子供たちの姿であった。
私たちと子供たちに共通するものなんてないかもしれない。
いつまでたっても、考え続け、悩み続けるかもしれない。
でも、真剣に向き合い考え続けられる場所、それが私たちと子供たちの居場所である。

5th

Mizuno Yuka

「もうすぐ受験ですね」

五期　水野佑香

正直、はじめは塾講師と何がちがうのだろうかと思った。

塩原ゼミに入り、はじめての夜教室は半ば強制的なもので、行かない週には罪悪感にかられた。

夜教室に行った人たちからの報告を待つ、夜教室に行くのは自分が担当の日だけでいい。

行く人と行かない人の差がどんどん広がっていく感じがした。

子供たちとの距離もどんどん遠くなっていった気がした。

このままでいいのだろうか？私がすべきことは何なのだろうか？

前期はただただ、土曜の「夜」がくることが怖かった。

夏が終わり、新学期が始まる。どうやら、夏合宿で夜教室に関する話し合いが行われたらしい。

新たにコンセプトが決まった。少し心が軽くなったような気がした。

私は夜教室に一体何を求めていたのだろう？一体何をしたかったのだろう？

なんで心が軽くなったのだろう？

その週その疑問を携えて夜教室に向かう。子供たちと向き合ってみようと。

子供たちは明らかに気を使ってくれているようだった。本当に申し訳ない気持ちになった。

大学生側がこんなことでいいのかと思った。

それから、時間が空く限り夜教室に向かうようになる。自然に。

行くたびに、ほっとできる環境の変わっていったと思う。子供たちとの距離も縮まったと思う。

仕組みも大きく変わった。新しいルールができた。

担当という概念がなくなり、「いつでもきていい場所」になった。

私たち同士で意見を共有しあう環境も整った。

行けない週があっても、子供たちの顔を直接見ることができなくても安心することができた。

時間が経過するごとに、子供たちは真剣に勉強と向き合うようになっていく。

私たちに何ができるだろうかと、悩むことも多くなる。

今はただ日々苦しいだけだろうが、きっと未来には「可能性」が広がってくるはずだ。

勝手な思い込みかもしれないが、今、ここで諦めてほしくない。受験まで後少しだ。

この一年を通して、私たちは何かを与えることが出来ただろうか？何かを得たのだろうか？

そう考えて、思い耽ることができた。それが貴重なんだと思う。

ひとつひとつの出来事が、感慨深い。過去があったから今がある。

そして、私たちはこれからも彼らと一緒に学んでいきたいと思っている。

もちろん、机上の学問だけではないという意味で。

4th Shigeta Shunpei

大学生になってから、夜うまく眠れないことが多くなった。高校までは毎日スポーツに汗を流し、授業にはしっかりと出席し、よく食べよく眠り…そんな生活リズムが大学生になって乱れてしまったことが原因だと思っていた。大学生になると、朝まで騒いだり、お酒を飲んだり、誘惑は増える。その場その場の快楽に身を任せているうちに、夜安らかに眠りにつくリズムを自分から放棄してしまっていたのだと思っていた。しかし、最近になって夜眠れない原因が全く別のところにあることに気付かされた。

僕は、夜眠れなかったのではない。夜、眠りたくなかったのだ。なぜ、眠りたくなかったか。それは夜寝る間際の時間帯になって、今日一日に対する未練を、なんとか解消しようともがいていたからだ。

高校の時分には、自分の一日一日に、確たる目標を持っていた。高校サッカーで、全国大会に出場する。そのためにコーチが与えてくれる厳しいメニューを黙々と、夢中になってこなす毎日。サッカーだけをしていれば良かった。「今日すべきこと」は誰かが教えてくれた。具体的な目標があって、具体的な夢があった。だから、夜は「今日は頑張った。一歩前に進んだ。明日も頑張ろう」という気持ちで眠りにつくことができていた。ところが大学生になって、自分はそんなにシンプルな生き物ではなくなってしまった。確たる目標もなく、ただなんとなく過ぎていく毎日。深夜3時過ぎても眠らない。そわそわと、何をするわけでもなく、立ったり座ったり、本を読んだり。ただストイックに目の前のメニューをこなしていたころの溌剌とした自分が、眠ることを許してくれない。まるで一日なにもせずに眠ることが甘えや罪であるかのような意識が、根っこに刷り込まれているのだ。「今日一日で何か、前に進んだ」という実感がほしい。そんな未練や不完全燃焼感が眠りを妨げ続けた。しかし何を目指せばいいか、そのために何を努力すればいいのか、誰も教えてはくれない。

このような変化を、4期のゼミ生はFriend Projectを通して、まさに体感していたように思う。勉強を教え、子供たちを高校へ進学させるという具体的な目標があった2011年度。日々多少のトラブルがあっても、前に進んでいる実感は常にあった。しかし受験が一段落し、子供たちが高校生になった2012年度。居場所づくりというふわふわとした言葉に、自分たちの向かう先がわからなくなった。延々と繰り返されるミーティングでは、私たちを具体的な目的地へ連れて行ってくれそうな「それらしい

キャッチコピーが浮かんでは消えていった。私たちがもがけばもがくほど、顔を出す子供たちは減っていった。

ある時点で、私たちは腹を括り、その不安や不完全燃焼をそっくりそのまま受け入れるようになっていった。「目標やそれに向かったステップばかりが全てではない」最初は半信半疑だったものの、次第に本当にそう思えるようになった。子供たちと対面したその瞬間、そこにあるもの、そこにある空気が全てだと、少なくとも僕は本気で思うようになった。すると、何も前に進んでいないかのように思えていたFriends Projectの空間には、大切なものがたくさん転がっていることに気が付くようになった。あの空間、あの関係そのものが宝物なのである。僕たちが手前勝手に「停滞」と捉えていたあの空気感の正体は、実のところは「安らぎ」だったのかもしれない。

去年の暮、そのスイッチが入った途端、僕は夜うまく眠れるようになった。なにも前に進めなかったかのように思えた一日でも、ゆっくりと振り返り見つめなおしてみれば、自分はどこか必ず一回り大きくなっている。目標に向かって最短距離で突っ走っていては気が付かなかった、自分の新しい側面に出会うことがある。常に具体的な目標を持って生きることそれ自体は間違いではないが、全ての時間に目標がついて回るというのは、思い込みでしかない。そのような考え方をFriends Projectを通して学んだ。

Relationship

友達なのか、先生なのか、他人なのか。
「私」は、どれになればいい？

4th Yamazaki Sayaka

「報告書に見えないトコロ」

5期山﨑紗也加

2013年1月30日、FPを通して、私たちが高校生に「与えたもの」「与えられたもの」について考えた。FPの渦中にいる間私たちは「このプロジェクトで何を与えて、何を与えられているんだろう」という問いに幾度となくぶつかり、答えを見出せないでいた。しかし、もうすぐで2年間のFPが終わる今書き残す意味でも少しばかり羅列してみようと思った。

◆与えたもの

学力（学習機会）

大学生というロールモデル

高校生一人ではできない経験（イベントによる遠出や書き初め大会等）

話をきく、話をする空間、時間の提供

◆与えられたもの

楽しい時間

多文化共生、多様性に考え、触れる機会

頼りにされることへの喜び…

嘘を並べてはいないし、正式な報告書として書き残しておく成果ではあるものの釈然としないのである。一体なぜだろうかと考えた結果、この振り返りには「私達にあっていないとき」の高校生と「高校生と会っていないとき」の私が欠如していたのだと気付いた。私達は時間を断片的に生きているのではないのだから、成果（変化）だって断片的に書き残すべきではないと思うのである。

私事ではあるが、一人で考え事のできる「夜」、むしろ「夜中」という時間帯は非常に大事な時間になっている。朝には今日やるべきことを頭の中でリストアップし、昼は主に学校やバイトと人とのコミュニケーションに費やしてきた。一人になって何かを考えたり、思い出してみたりという時間は2時間あればいいほうだ。その自分にとって大事な「夜」の時間に高校生のことを考えたり、悩んだりする時間があったことは私たちと彼らの間に毎週土曜日だけの関係ではなく何かしらの継続的な関係が成立したということなのだろう。この「関係」というものは与えられたものでも与えたものでもなく、結果だ。つまりBIG BANGという週に一度の一時的な「場」は、継続的な「関係」を生んだ。そして、その「関係」は会っていない間も成立する「場」を生むのではないだろうか。私達は、卒業と共に居場所作りプロジェクトの中心から離れることになるのは事実だ。しかし、外国にルーツをもつ人々との関係性が絶たれるわけではなく、むしろ「会っていないとき」の彼らにむけた想像力や関係性を意識し動き続けることが重要であるし、それは私達だからできることなのだいうことをこの胸とこの報告書に深く刻もうと思う。

5th Kawamata Yusuke

彼が教えてくれたこと

５期　川又 友輔

この報告書を書くにあたり、春学期のフィールドノートを見返してみた。鶴見に通うようになった去年の6月頃がひどく懐かしく感じられる。フィールドノートは我ながら稚拙な文章だなと落胆しつつ、「あの時はこんなこと考えてたんだなぁ」と感心したり、ガッカリしたり、中々楽しませてくれた。

思えば初めての夜教室はかなり緊張しながら教室へと足を踏み入れた。夜教室デビューが遅れフィールドワークの話し合いに全くついていけていなかった私は、その遅れを取り戻さなくてはという想いと、教室の雰囲気に上手く馴染むことができるのかという不安を抱えていた。「教室の中はどんな雰囲気なんだろう」、「このドアの向こうにはどんな子ども達が待っているんだろう」。様々な不安と、ほんのちょっとの期待を胸に鶴見夜教室の扉を開いた。

ひどく緊張していたはずなのに、この日のノートは「すごく楽しかった！」という言葉で締められている。必要以上に不安がっていた私の緊張をほぐしてくれたのは、他ならぬ生徒達の方だったかもしれない。初めて教えた中学生は元就だった。私は勝手な先入観で夜教室の生徒達をセンシティブな存在として認識していて、恐る恐る接していた。しかし、そんなガチガチな私を前にしても元就は、「ここわかんないんですよぉ～」と昔も今も変わらない愛嬌のある笑顔で声をかけてきた。真面目で礼儀正しく、優しい子だと思った。

翌週も夜教室へと足を運んだ。足取りは前よりも軽かった。この日も勉強を見てあげることになった元就から思わぬ言葉かかった。「そういえば名前、なんて呼べば良いですか？」思わずハッとさせられた。人と関係を交わす時に普通最初にするべき自己紹介をするのをすっかり忘れていたのだった。つくづく初回の自分は視野が狭かったことに気付かされた。

ガチガチの先入観を持って夜教室に参加し始めた自分とは対照的に、元就をはじめとする鶴見の中学生達は大した先入観なんか持っていなかったのだろう。単なる好奇心で、私を知ろうと声をかけてきた。大学生にもなると色々なことを考えなくてはいけなくなって、知らず知らずのうちに頭でっかちになる。知らぬ間にしがらみが増えていく。しかし、人とある一定の関係性を築いていくとき、それらの存在は邪魔になる。考えて、考えて、存分に理論武装したのち、全部脱ぎ捨てる。そんな人間関係における武装解除の大切さを教えてくれた気がした。

日ごとに彼らとの関係は深まっていった。わかっていたつもりが全然わかっていなかったことに気付いたり、クリスマスパーティーを開いて無邪気な中学生の一面を垣間みたり、ただ単に「教えるゼミ生―教わる中学生」という関係で表現することは難しくなった。彼らにとって私たちは兄のようにであり、姉のようであり、先生のようでもあり、はたまた友達のようでもあるのかもしれない。それはまた逆も然り。必然的に話し合いで考えなくてはいけない視点は増えていったが、教室に入ったらそれを一回忘れて接する術を少しずつ身につけていったような気もする。

受験が間近に迫ってきた1月26日の夜教室は、新たな試みとして面接の対策をすることになった。相手は初めての夜教室で面倒を見た元就だった。元就とはずいぶんと仲良くなったが、この日は面接練習ということで教室に元就と自分２人だけという初めての状況だった。しかしそんな環境の違いを気にもとめず、元就は私の面接シートに対するフィードバックに真剣に聴き入る。真っすぐな瞳。無邪気な笑った顔。最初から何も変わらないところがある一方、彼はこの場である程度私のことを信頼してくれていた。彼の目には「頼りになる大学生」として写っているのかも。そう考えた時、途端に責任感が芽生えて背筋がスッと伸びた気がした。相手を信頼すること。そしてそれに応えること。その繰り返し。ここでもやっぱり人との付き合いで大切なことを、すごく当たり前のことかもしれないけど、彼に気付かされたのだった。

そんな夜教室も、もうまもなく終了する。受験という一つの短期の目標があり、やっぱり合否は気になってしまうが、「彼らの可能性を一緒に探る場」であることを忘れずに、彼らから学んだ人との関係において大事なことを忘れずに、残りの2回の夜教室の時間を大切に過ごしたい。

5th

Yamazaki Asako

えびぬま×やまざき対談

夜教室のあと、鶴見にて。

E：中学生から与えられたものはなんですか？ひとつお願いします。

Y：たぶん、誰もが「変化」ってまずは言うと思う。たぶんね。（笑）これは中学生に与えられたものかもしれない。最初はじめたころは。知らないことばっかりで、偏見もあったし。

やっぱりこういう場所をうけるってことは、結構日本語ができなくて、日本語を基礎から教えるレベルだとおもったのよ。でも、行ってみたら。そんなことはなくて、みんなベラベラ日本語でしゃべって、ふざけあってるし、明るいし。学校でも友達がたくさんいて、楽しんでそうな感じだったのね。だから、わざわざこういう場所を設ける必要があるのかは最初はわからなかった。

でも、何カ月も一緒にいてわかったのは、必要あるかどうかじゃないってこと！

私たちが勉強を教える必要が必ずしもなくても。私たちが毎週あの時間にいるっていうこと。よる教室があるっていうことに意味があるのかもしてないって思えた。

こういう変化に気づかせてくれたのは、中学生たち。あいつらが、少しずつあの場所を好きになってくれたり、求めるようになってくれたりしたことから、そう気づくことができたのかもしれない。

こういうくさいこというのは、あんまり好きじゃないんだけど、でもほんとにそう。

E：なるほど。まぁ、確かに初めのよる教室のと今の夜教室はもうすでに変わってるよね。

Y：そうそう。あと、私自身も最初と今では考え方も違うかも。なんか、最初は結構ドライで、いろいろなやんでるみんなをみて、正直、割り切ってやっちゃえばいいとかって思ってたのよ。実は。でも、夏休み中にみんなで夜教室のことを話し合った時に、ドライじゃなくなっていうか。もっといろいろ感じながら、心が揺れるようになったっていうか。（笑）

例えば、「勉強かサポートか」みたいなところで悩むようになったていうか。勉強を教える場なのか、あいつらとぶつかりあって、心のサポートをする場にするのか。

私たちは、そういう「肩」や手の存在でいてあげることができたのかなって。

E：そ、そういうことか。（笑）そういう存在になれたかどうかっていつまでもわからないことだけどね。

Y：まぁ、そういう存在になれた！っていうゴールがあるとは思わないし、実感をもつのも難しいと思う。いまでもいろいろ問題はあるしね、夜教室に。全部解決できてるわけじゃないし、そもそも相談されてないこともあるしね。でも、そばにいて、open armsでまつことができてればいいのかな、とも思ったり。

E：open armsね。（笑）

Y：えびきもい。（笑）

E：え、ごめん。（笑）で、あさこはバイトでも生徒を教えることがあると思うんだけど、そういう経験をしてから、夜教室へいくことに対して考えたこととかあった？

Y：話変えてきた。（笑）

そうね。最初は教えた経験だけじゃなくて、外国籍を持つ子どもたちを教えた経験があるから、そういうのをいかしてできることがあるんじゃないかっておもって夜教室に通い始めたんだけど、これが違ったんだよ。全く違うケースというか。これも夏休みを超えてわかったことで、最初はバイトでの経験が邪魔してたなって思う。

Y：経験が邪魔をする、ね。なるほど、いろんな子供たちがいるからね。でも、本当に夜教室をやるのは楽しいよ！来年も本当に楽しみ。

中学生の成長もみたいし、一緒に私も成長したいって思う。来年からまた一緒に可能性をさぐって行きたいと思う。

E：それって夏休み中におれらで考えたやつだよね。やっぱりあさこにとって５期でかなり話し合えたのが良かったのかな。

Y：そうだね。あの話し合いは大切だし、良かったと思う。これからも5期で考えていといとやっていくのも楽しみにしてる！

E：だよね！今日はありがとう！また来年はなしを聞きたいと思うから。よろしくね。

Y：ありがとうございました！

5th

Ebinuma
Aoi

「12月22日、夜」

５期　海老沼蒼生

吐く息は、行き先をなぞるように、暗く落ち込んだ鶴見の空に漂って消えた。年末の土曜日、意思とは裏腹に、凍えた脚は駅へ自然と早まる。冷えたコーヒーカップを片手に、ケーキとポテトチップスを胃袋に詰め込んだ年齢不相応のひとときに思いをはせ、ふとバス停に目を見やる。我が家へと、並ぶ人々。彼らを待つのは、日本の一般的な一軒家なのか、異国情緒あふれる玄関なのか、誰も待つことのない自由なベッドなのか、ここからは判断できない。少なくとも彼らには帰ることのできる場所があるのだろう。

夏に改築された駅ビルを抜ける。初めて来た頃にはなかった、新しくできたパン屋の香ばしいにおいが、余計な食欲をそそる。登る階段の壁は、白色がまぶしい。我が家への帰還を阻もうとする数多の誘惑をかわし、ようやく改札を抜ける。突き刺すような冷気から逃げるように、開いた扉へ飛び込んだ。背後で扉が閉まる音を聞きながら、初老の男性の隣の、空席に向かった。

西日暮里までは何もすることはない。リュックの上においた両手を見つめる。

品川で降りると、友人はいった。私は、用事があるからそのまま帰る、といった。

１０分前まで、生徒の日頃の行ないに祝杯を捧げるクリスマスな時間だった。残り２ヶ月、心がすりきれるかもしれない期間を乗り切って欲しい。子供騙しのジュースの栓を抜いた。とはいえ、当の生徒本人たちよりもはるかに、私達が待ちわびていた時間だ。大学生がさわがしい。中学３年生のお年ごろの男子は、うまく空気には乗り切れていないようだ。表情はかたい。しかし、心なしか、その顔から高揚をぬぐい去ることはできず、15歳なりの大人へ背伸びしている彼らが見え隠れする。なんだが可笑しい。素直になればもっといいのに。自分もそんな感じだったか。そこの感覚は、世界共通なのかもしれない。わかろうとしてもわかることのない彼らに、少ない共通点を見いだしていた。

夜、雨の音を聞きながら、兄弟が寝床を共にする仲睦まじき姿を、夜雨対床という。４月とは違い、今は、生まれも育ちも違い、年齢も離れた彼らの、一番の理解者の兄になりたいなど、そんな傲慢さを私は持ち合わせていない。人それぞれ苦しみを背負い、それぞれの悩みがある。少なくとも私の苦しみでは、彼らの苦しみを完全に理解することはできない。苦しんでいる物事も違う。だから、私は待つことにしている。隣で、何も言わなくても分かる兄ではなく、何かを言わなければわからない１人の友人として、話してくれることをまつ。彼らは時に雄弁である。私達が思っても見なかった大人な一面を見してくれることもある。それらをパズルのピースのように寄せ集め、皆で話し合う。理解しようとする姿勢は、あの教室を家とはまた別の、居場所にすることにつながるという淡い希望も抱いている。

自分がやりたいこととは、いまになっても悩むことだ。やりたいこととできることの境界。将来の「可能性」を広げるという仰々しいお題を設定し、彼らに私自身の姿を重ね合わせる。

「可能性」。長く生きた「大人」たちの、自己都合で塗り固められた「大人」の不条理。くじかれた夢をおいかけることを諦めた「大人」の言い訳。私は、大人の「可能性」を聞かされる時、社会を知らない中学２年生みたいに言い張る。それが社会的に見ればそれが「正解」であることも知っている。でも彼らにとっての今の幸せはまた違うのかもしれないのだ。その可能性を信じてみる。

中学３年生の頃。一瞬を楽しむのに必死で、一歩先の未来を一ミリも考えたことがなかった。彼らとともに、私も悩む。いま振り返って「あのときやるべきこと」ではなく、15歳の時本当にやりたかったものはなんだったのか。彼らの可能性を探りながら、私の可能性を探る。私の将来の可能性を、探る。

次は西日暮里だ。隣の初老の男性はいつのまにか、くたびれたスーツ姿のサラリーマンにかわっていた。友人はすでに降りている。床下の、車輪が転がる軽快な音に耳を澄ます。体を起こし、ドアに向かう。

電車は、人を吐き出し、人を飲み込み、旅立っていった。虚無。疲労。不平。不安。ホームに残る大人の沈黙は実に、多弁。生徒の喧騒は実に、寡黙。

夜、晴れた夜。私がもらった彼らの希望で、大人を掻き分けた。

Realize

学べば学ぶほど、自分がなにもしらなかったことにきづく

5th Yoshida Mayu

2012年度　フレンズプロジェクト報告書

5期　吉田万裕

鶴見の中学生たちに、私たちは何を与えることが出来たのだろう。学習サポートの提供という名のもと、10ヶ月近く活動してきたわけだから、数多くとは言わずとも、何かしら与えることができたのではないか。ちょっとだけ、いや、かなり期待する一方で、悲しいかな、いくら考えても何も思いつかないのが現実である。曲がりなりにも勉強を重ねてきた中学生たちが、もし志望校に合格出来たりなんかすれば、それが一つ彼らにとって成果となるかもしれない。でもそれは、果たして私たちが与えたことになるの？いや、それは違うよね。普通に考えて、それは彼らが実力で得るものであり、私たちはせいぜいそのプロセスにちょっと関わらせてもらった程度にしかならない。それに、もし高校進学が「私たちが与えたもの」になってしまったら、私たちは、彼らと一緒に可能性を探ったことにはならず、ただ押し付けたことになる。私たちは彼らに勉強する空間を与えたかもしれない。まあ、これは物理的にそうであっただろう。おしゃべりする空間、これもそう。もやもやしたり、他人にちょっかいを出す空間、これも当たり。でも、そこにどういう意味付けをするかは中学生たちがやることで、私たちが推測したり、ましてや決めつけることに意味はないんじゃないか。そもそも、彼らに何かを「与えた」なんて、言ったり考えたりすること自体にとんでもないおこがましさを覚える。だから、そこはちょっと濁させてもらって、彼らが私たちに与えてくれたものを考えることに逃げてみる。というか、本当はそっちが書きたいから。

与えられたといっても、向こうが意図的にくれたものじゃない（たぶん）。でも一つ大きく思い知らされたのは、やっぱり私は私でしかなくて、どんなに「常識的」に見える考えとか価値観をもっていたところで、それは結局、私という小さい存在のものでしかないということ。こうやって簡単に文章にしてしまえば至極当たり前のことのように映るけど、気付いたときにはかなりの衝撃だったし、これによってちょっとした諦めみたいなものも覚えた。「高校に行かないと、どうなるのか？」と聞かれたときに、自分が歩いているレール以外にもたくさんのレールがあって、それぞれが固有の価値観を原動力に、そのレールの上を歩いてるんだということに、気付かされた。
私自身が中学、高校、大学って普通に進んできたことに疑問を抱いたことがなかったのは、ただ単に、周りのみんなもそうだったから。「みんなそうだから」という理由が通用する集団。そういう集団の中での常識は、私の常識でもあると思っていた。でも、そう思い込んでるのって、危険なことなのかも。同じ常識を共有しているようで、それは限りなく似ていることはあっても、完全に同じじゃないのかも。常識というのは存在するけど、常識もまた様々なのかも。ん、でも、ちょっと待って。そうすると、これまで「同じ状況にいて、同じ価値観をもった仲間」と思ってた人々が、全然違うカラーに見えてくる。さっき「ちょっとした諦め」と書いたけど、それによって、彼らに対する接し方も変わった。それまで彼らに「何かしてあげたい」と思っていたし、それは自分が夜教室に参加することに意味をもたせたいためでもあった。でも、そんな考え方がばかばかしく思えた。だって、私と彼らが違うのであれば、その差を「支援」とかいうもので埋め合わせようとすることに、何の意味があるのだろう。勉強を教えるなんて、形だけでいいのかもしれないと思うこともある。本当に私たちがやらなきゃいけないことって、彼らと本当の意味でフェアに接することなのかも知れない。

このように感じるようになりましたとは、今だから言えることで、春学期に活動している時点では、考えもしなかったこと。こういうことにうっすら気付くまで、毎週土曜日の「夜」は義務感でいっぱいだったし、まるで塾講師のバイトを再現する場のようだった。だから、めんどくさかった。コーディネーターなんて、なんで引き受けちゃったんだろうと何度思ったことか。でも回数を重ねるうちに、気付いたら今では土曜日の「夜」は毎週の楽しみにまでなっている。誇張じゃない。本当に、今では毎週土曜日の「夜」が楽しいし、また彼らのことを考えることが楽しい。今では毎週土曜日の「夜」に、鶴見に行くことが当たり前になっているけど、不思議なことに、義務感はゼロ。すごく個人的な、些細な変化だけど、でも確実に感じる。私の中で、土曜日の「夜」は、変わった。すごく陰鬱なグレーが、だんだん抜けていくイメージ。これからも土曜日の「夜」を重ねていくなかで、この色は一体どうなるのだろう。ちょっと不安ではあるけど、すごくわくわくする。

5th Miyazako Anna

つるみと昼の時間

５期　宮廻杏奈

私がつるみの彼らの存在を感じるのは、「昼」であることが多い。

それゆえ、鶴見よる教室に夜のイメージを重ね合わせたことがない。鶴見とつながる時は、いつも明るかった。

よる教室は常に元気だった。いつも彼らは日中に有り余った力を教室で放出させているかのようで、既に体力残り僅かとなっている大学生はくたくたになっていた。冗談を言って笑ったり、隣の中学生にちょっかいをだして怒らせたり、叫んだり、時には泣いたりもしていた。このようににぎやかなよる教室は、１日の終わりとは思えないパワーに溢れていた。私はそこへ行く度に、まだ昼の延長線上に居る気分になり、使い切った体力が再び湧いてきたかのように元気になっていた。

また、よる教室に居る時間より、運営に関して話し合う準備の時間のほうが長かった。毎週土曜日の約３時間は彼らと夜教室で過ごすことになっている。しかし、同期はそれ以外の時間も彼らのことを考え続けている。毎週火曜日、ゼミの後は約２時間の打ち合わせを続け、夏合宿ではほとんどの時間をこれに割き、そして今でも何かが起こるとすごい速さでＳＮＳの画面が更新されていく。重要なのは、よる教室に居る時間だけではなく、それ以外の昼の時間にどれだけ彼らのことを想ったかが大切なのだということに気づかされた。

このように、元気になれる、そしてゼミ生がひとつに集まれる時間を鶴見よる教室からもらったと私は思う。そして、それらを通して、一生懸命に相手に向き合うこと、そのために時間を惜しみなく割くことの大変さを実感した。彼らと向き合う時は、「慶應生」という肩書きはまったく意味を成さない。それは、以前「慶應生」の塾講師として雇われていたことのある私にとって、最初はとまどうことだった。塾の教室では生徒はしっかり指導を聞いてくれる。しかし、よる教室の子どもたちにとって私たちは何のレッテルも持たないただの人間であり、彼らは生身の人間同士で接することを求めてくる。何も持たない自分になって、私はとてつもない無力感に陥った。勉強以外で彼らがＳＯＳを出している時、学力なんて何の役にも立たないということを痛感した。しかし、それでも彼らに向き合う為に、ゼミ生は毎週何時間もの時間を割いて報告と相談をした。その後、少しずつ少しずつ良い知らせが聞こえるようになった時は、ゼミ生の努力が報われてとても嬉しかった。昼の時間が、夜の時間をより良くしていった。

反対に、もし私たちが彼らに何かをあげることができていたなら、それは思い出だと思う。よる教室で、私たちは彼ら全員に特別な知識や意識を与えられたわけではない。もしかしたら、私たちが居なくても自分の力で勉強できる子どもも居たかもしれない。それでも、この教室に来てくれていたなら、将来大きくなって自らの中学生時代を回顧した時、鶴見よる教室のことを懐かしく思い出してくれるのではないかと思う。欲をいうならば、その時「鶴見よる教室」が改めて彼らなりに捉え直され、その生き方や価値観を構築する一部になってほしいというのが私の希望だ。

4th Kuwata Erika

「土曜日の夜」

桑田恵理華

塩原ゼミのゼミ生にとって「土曜日の夜」は夜教室が行われる特別な時間である。

３年生の頃は、毎週土曜日は予定が入っていたため、同期のゼミ生の話を聞いて自分なりにどんな場所であるか想像していた。実際に４年生からは参加することができ、想像以上にゼミ生と高校生がお互いに信頼を持っている印象が強かった。１年間かけて育まれた同期と高校生の関係性を初めて目の当たりにした時に心がほころんだことを今でも覚えている。そして、普段は高校生となかなか関わりを持つことがない日々の中で、彼らと一緒に時間を過ごすことで多くのことを考えるようになった。

外国に繋がる子供達との居場所作りプロジェクトとして始まった私達の活動は非常に裁量が大きく、その分戸惑ったり、悩んだりすることが多かった。１年間というゴールが見えている時間の中で、別れが訪れることが分かっていながらも、彼らにとって大学生と土曜日に過ごす夜の時間が何かしらの居場所になってくれたらいいなという想いが常にあった。そんな想いを持ちながらも、具体的にどんな形で居場所作りをするのか非常に悩んだ。勉強のほかに、月に１回はイベントを企画し、外の世界との接点も持つように努めた。遊ぶだけではない新たな学びを彼らが私達を通して得て欲しい。そんな中、彼らから学ばされることの方が多かった。生まれた場所や育った環境が全く異なる彼らのバックグラウンドを過剰にするよりも、彼らの性格や人柄に目を向けることで、より歩み寄れると感じた。こちらから心を開くことから相手の心が開かれる。互いの生まれ育った環境の違いが、相手に警戒心を抱く要因となってはあまりにも悲しい。彼らとの１年間を通して、人との向き合い方について考え直させられた。facebookやtwitterなど、現代では相手の目を見ずにコミュニケーションをはかることが可能な時代になった。相手の情報について、会話を介さずにデータとして得られることができる。しかし、お互いが信頼しあえる関係を築く上では相手についてどんなにたくさんのことを知っているかも大事かもしれないが、相手とどのくらい時間を共有できたのかもとても大事だと感じる。表情や口調や口癖など相手と直接コミュニケーションをしなければ分からないことがたくさんあり、それらがその人に対して愛着を持つきっかけであったりもする。そんな人と向き合う上での原点に振り返ることができた。

また、自由度が高いプロジェクトであり、悩みが多かったことがよりゼミ生同士の結束を固くしたのではないかと感じた。楽しい時間の多くを共有する友人はいても、悩み続ける過程を共にする人は塩原ゼミに入る前まではほとんどいなかった。本気で共に悩んだ同期とはこれからもずっと繋がり続けていたい。非常に濃い時間を過ごすことが出来たのは、高校生と塩原ゼミのゼミ生のおかげだと強く感じる。

来年から社会人として新たな生活になるが、「土曜日の夜」毎週塩原ゼミの後輩達が活動しているということが大きな励みになる気がしてならない。

Ushioda kokusai syougakkou

たぶん、おそらく、きっと、これまでにない戸惑い。

Yoshikawa
Haruka

元気とやる気』

三年吉川春香

「無茶振りにもほどがある……。」

部活の帰り道、夜空を見上げながら呟いた。今日は土曜日。13:00からのふれあい館の学習支援教室に行って、部活に行って、その後ランニングも行うという、ハードな曜日だ。といっても私の場合は好きでやっていることなので、お店の手伝い等を必然的にしなければならない（ふれあい館に来ている）αくん達から見れば贅沢すぎる愚痴であろう。

そう、αくん達はあの年頃の子ども達にしてはなかなか厳しい環境にある。彼らにとっては外国語である日本語で授業・試験を受けなければならないし、受験の際も科目が五科目から三科目に減らされるだけで、それ以外の特別措置はないようだ。せいぜい面接官が、多少の言葉の詰まりなら寛容になってくれる程度である。しかも科目の措置は来日して三年以内の者にしか適用されない。なまじ会話の方はできるようになっているものだから、「もう日本語できるようになったでしょ？受験大変なのはみんな同じなんだから、平等、平等。」と言わんばかりの対応をされてしまうのだろうか。来日する前の教育状況への配慮もあるのかどうか分からない。

特に英語は「外国語の日本語で」「さらに外国語を習う」という、非常にフラストレーションの溜まる科目である。彼らからすれば、必死に日本語を勉強してそこそこ話せるようになったのに、さらに他の外国語を学ばなければならない。しかも英語と日本語はかなり文の構造が異なる。中国語の方が英語にはまだ近いので、いっそすべて中国語で教えられればいいのだが、文法は中学レベルがやっとの自分が、それも中国語ではきちんと教えられているのか常に不安だ。ならば日本語で教えればいいだろうとなるが、日本語で他のボランティアの人が教えている様子を見ると、確実に理解していない。仮に問題が解けたとしても、解答をチラ見していたり、「答えにもなんかこんな感じのが載ってたから、多分こうなんだろう」という解き方で、受験になったら玉砕は免れないであろう。本当に、彼らも私も「無茶振り」されているにもほどがある。

原さん達は「中国語かなりできるから」「それで説明してくれた方が、αくんたちかなり理解が進むから」と言ってくれてはいるが、自分の中国語は「私、ここ、ある、分カル？」に近いレベルで、彼らが必死に理解しようとしてくれているから通じるレベルである。これで「（授業内容が理解できる説明を）あたえられた」と言えるのだろうか？

それでも、来日当初は緊張した面持ちが多かった子ども達は、来る度に表情に輝きが増している。おそらく、ここが母語で同年代と話せる数少ない機会であることもあるだろうが、日本語も（口語の方は）かなり上達し、周りの生徒との交流も生まれてきているのもあるのだろうか。最初は「あいうえお」の発音すらままならなかったのに、嬉しい限りである。

そんな彼らの日本語の上達ぶりを見て、私もこれではいけないと思い、先日中国語の単語集を買い直し取り組み始めた。このモチベーションの変化も彼らの笑顔が元気を与えてくれたおかげである。けどねβちゃん、いくら元気でも前の席の人の携帯取って遊んじゃダメよ。

潮田国際小学校

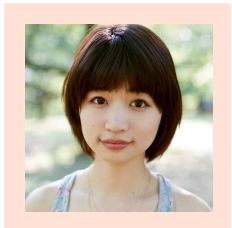
放課後サポート

「つるみーにょ」

潮田小学校が外国人国籍を持つ生徒たちを対象として行っている放課後の学習サポートの活動です。ゼミ生は、毎週水曜日の放課後国際教室に通い、宿題の手伝いを中心とした学習サポートを行っています。
小学校の先生が独自の判断で、放課後教室への参加が必要だと判断した子供達に声をかけ、保護者の承諾を取ったうえで参加が決まります。約 30 人の子供達が参加しており、1 年生から 6 年生まで年齢層は幅広いです。

Ibasho

そこ、だれの居場所？

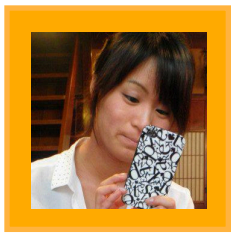
5th  So Kaori

中学３年生。

FWを通して、感じたのは、生徒とのかかわりとは、恋愛と同じだなあということである。いや、恋愛というか、人付き合い一般に言われることであって、それは特にFWの生徒だから、外国人だから、とかは関係ないんだ、ということである。

私はこの一年を通して、特定の女子生徒と仲良くなり、その子と勉強、学校のことに限らず、家族のことや恋愛のことを話すようになっていった。（といっても自分からは話さず聞き役に徹していた。）中学３年生の時の自分もそうであったように、この時の女子生徒というのは大変いろいろな問題を抱えている。また、周りがおもっているよりずっと「自立したい、一人前になりたい。」という気持ちが強くある。同世代の男子よりも、中学３年生というのはずっと大人なのだ。彼女は、中学３年生という客観的事実に加え、複雑な家庭環境に大変悩んでいるようだった。彼女は私のことをとても信用しはじめ、家族や周りの大人にどんなことをされているかをことこまかに話はじめた。時には、それってDVなのでは？と疑うこともあった。周りに親身になって彼女の話をきく大人や友達はいないのかなとも思った。こうやってかくと私はとても親切で優しいお姉さん、という感じかもしれないが実はそうでもない。彼女に、彼女の誕生日会に誘われた時のこと。一緒に遊びにいこうといわれた時のこと。私は何かしら理由をつけて断っている。後者は、一緒に遊びにいったら何かあったとき自分に責任が生じるから、断って間違いではなかったと思う。しかし、前者、彼女の誕生日会に関しては、私は行っても何の責任も負うことはないし、行くという選択はできたと思う。でも、私はそこで予防線をはったのだ。複雑な家庭環境だから、行ったらどんなことがあるかわからないし、そこまで彼女の人生に介入することは私にはできない、と思ったのである。私は常日頃、「周りに困っている人がいたら助けよう。」と思っている。けれど、実際に（おそらく）困っている人がいて、人生にもっと介入してほしい、と思われているのに、そこを断ったのは自分で自分にたいして驚いた。「いざってなると、結局自分が大事なのか、めんどくさいって思うんだ。。。」と自分に対して失望した部分でもある。でも、私はどうしたらよかったんだろう。

ただ、自分を正当化するわけではないが、「少しでも役にたっているのかな」と思ったことはある。夏休み、二人で彼女の地元の夏祭りの屋台を回っていると、彼女の友達や同じ中学校の生徒が話しかけてきた。そのとき、中学生の彼女に対する態度は「あっあの芸能人の子だ」という風である。実際彼女は綺麗なので、芸能活動をしているという。テレビにも何度か出演しているらしく、他の中学生にとってみたら憧れの存在なのかもしれない。だからこそ、周りに腹をわってすべてを話せる友人はいないのではないか？と私は勝手に想像した。そうだとしたら、私のようなちょっと年上のなんでも話せるお姉さんというのはすごく貴重な存在なのかもしれない。彼女の家庭は、話に聞く限りどんどん問題が生じてきているようなので、これからも彼女の話をきいて、SOSに敏感でありたい。

4th  Kasama Sawako

塩原研究会4期　笠間佐和子

“居場所”。この言葉は今年度のフレンズプロジェクトにおいて、最も使用頻度が高く、最も悩まされたワードだったように思う。“居場所”の概念や価値観はもちろん、名称そのものにもずいぶん頭を抱えた。改めて振り返ると、今年から新たに取り組んだ「居場所づくりプロジェクト」は、当初から「居場所ってなに？」「それってつくるものなの？」という疑問で溢れ、非常に曖昧かつふわっとしたコンセプトからの出発だった。

「居場所づくりプロジェクト」の話があがった際、私は、昨年の「夜教室」という場を通してできた生徒との関係がそのまま続くのだと考えていた。１年間のフィールドワークで、生徒達と良好な関係を築けていると感じていたため、せっかくできたつながりを１年で終えてしまうのはもったいない、もう１年一緒に活動したいと思ったことが、私の「居場所づくりプロジェクト」を始めるきっかけだったからだ。しかし実際には、去年の「夜教室」とは大きく異なっていた。「夜教室」は受験対策という明確な目標があった為、勉強すること、ひいては夜教室に参加することについて、ある程度の強制力をもっていた。対して今年は「居場所」という漠然とした目的だった為、土曜日への参加頻度を含め、様々なことが「自由」であり、私自身、具体的になにをすれば良いのかわからないまま、前期を活動していたように思う。目標や成果などの「答え」がみえないことが予想以上に不安になること、自分が目標や成果のプロセスに慣れきっていることを痛感する経験だった。

「居場所づくり」という言葉はなかなか厄介だったと思う。前述した「居場所ってなに？」「それってつくるものなの？」という疑問はもちろん、場の名称としても「夜教室」と違い、生徒と一緒に呼称できるものではなかった。生徒と考えた新しい名前、「BIGBANG」も浸透するまで時間がかかり、連絡等、なにかと「夜教室」の名前を借りることが多かった。やはり良くも悪くも「夜教室」の流れを強くくんでいたのだと思う。また、夏から徐々にイベントを行うなかで文字通り、「場をつくろう

としてしまいがちだったことに、同期の言葉で初めて気がついた。無意識に、イベントの「企画者」と「参加者」という構図に落ち着きかかっていたのだ。“一緒に”活動するという意識の大切さと難しさを再確認した一言だった。

「居場所」について悩みっぱなしの1年だったが、2年間のFPを振り返ってみると、土曜日のあの場所は、少なくとも私にとっては確かに居場所の１つだったと思う。その居場所で、（生徒達から）与えられたもの、（自分達が）与えたものがどれだけあるのか、正直、2年に渡る活動を終える今でもよくわからない。強いていえば「共有」していたのだろうと思う。生徒達やゼミ生と、あの場や時間を「共有」したことで、居場所について等、普段の生活ではなかなか考えが及ばないことについて悩み、話し合うきっかけをたくさんもらった。一生懸命に悩む時間をもらったといえるのかもしれない。未だにはっきりとした「答え」はみつからないけれど、今は、最後まで楽しく悩みつつ、2年間の最後をやはり楽しく「共有」できればと思う。

Mitanoie

ただ、いることに意味と目的がある

4th

Hori Sayuri

「ひととき」を大切にすること

4期　保里小百合

塩原ゼミで過ごした時間は、私にとってかけがえのない時間でした。ゼミ生や塩原先生に当たり前のように会って過ごしてきた2年間がもうすぐ終わろうとしていると思うと、心にぽっかりと穴が開くような思いがします。大学の研究会、としてイメージする以上のことを教えてくれた人たちとの出会いは、今もこれからも私の財産です。

昨年度は塩原ゼミに入ったばかりの3年生で、初めての夜教室でのフィールドワークと同時に、三田の家という空間で対話することの意味を学んだ一年間でした。今年度は、後輩として新たな仲間が加わり、4年生として関わったFriends Project。振り返れば、常にもやもやとした不安と、不確かな希望を抱えていたように思います。

高校1年生を中心に、高校生の居場所づくりプロジェクトとして始まった鶴見での活動。昨年度学んだことを生かして継続できたらいいと思っていました。しかし、実際は想定する通りにはいきません。高校生になって、目前にあった受験という目標から解放された今、次の目標は何だろう？企画に来てくれるかな？これでいいのかな？誰かが正解を用意してくれるわけではなく、自分たちで作っていく活動だということは昨年度から変わっていないのに、分かりやすい目標を失ってしまった私たちは途方に暮れて目的を探していました。昨年度以上に悩み、手探りでフィールドワークを続け今日に至り、もうすぐ卒業という一つの区切りを迎えようとしています。

辿り着いたのは、悩み続けることも悪くない、という一つの答えでした。常に悩みながらFriends Projectを実践してきたけれど、これから社会に出てもきっと悩み続けることは変わりません。むしろ、もっと悩むかもしれません。分かりやすい目標や評価を得られるのは学生として教わる立場にいる特権であり、社会の中で他者と仕事をするときに正解はないからです。多様な価値観や考え方を持つ人々と関わって活動するとき、100％の満足なんて得られない。それでも、自分なりに精一杯考えてそのひとときを全うすること。大学の教室を飛び出してFriends Projectに参加した経験は、塩原ゼミのOBOGになっても勇気をもらえるような一つのヒントを与えてくれたと考えています。

何かを作ったとき、誰かと過ごしたとき、どこかを卒業したとき…そのとき過ごした時間がどんな意味を持っていたのか、実感が追いつくのはいつも幾らかの時間が経ってからです。鶴見の高校生と過ごした時間も、高校生が大人になったとき良いひとときだったと思ってもらえたらそれ以上のことはないと思います。教室で、三田の家で、鶴見で大切なひとときを一緒に過ごしてくれたゼミ生、そして塩原先生、心から感謝しています。

三田の家企画　一覧

スロー＆ハイテクnight!

5月病ナイト～さみしがりやのプラットフォーム～

三田の師範

ひととき

協働

Something New

三田の家企画

本年度の三田の家の企画は、前期と後期で大きく形をかえた。

前期は参加義務であり、特定のグループの中で企画を決め２回にわたって企画を運営し、実行するものであった。それぞれのグループは三田の家を訪れた人々をもてなし、人々が三田の家をおとずれたことで何かをもって帰ってもらうことが目的の１つだった。しかし、私達の中で大きな２つの疑問が浮かび上がってきたのである。義務感で来る場所が、本当に三田の家という場所なのだろうか。そして、企画を運営するのであれば、何が目的であり、なにがゴールなのか、三田の家が何のために存在するのかがわからない、というものだった。スロー＆ハイテクnight、５月病ナイト、三田の師範という、三田の家の記憶にも、記録にものこる様々な企画がもちあがり、楽しんできた。

例えば、スロー＆テクナイトでは技術の発達、情報化社会が進む中で、便利になった一方で、現代日本で見られる睡眠障害や、人工食品などの問題について意識し、今の生活をもう一度見なおそうというというテーマのもと、HANIWA in the Darkやカレーの食べ比べ、当時世界一周中だった4期の重田をスカイプで呼び出したり、未来の都市のありかたなどを大胆に予想した。

5月病ナイトではワインとサンドイッチを嗜みながら、さみしがりやのプラットフォームとして、三田の家がどういう存在であるのかというのを、当日訪れたお客さんと一緒に議論したり、三田の師範では、三田の地図をつくり、地域の人々を巻き込みながら、三田の家の三田でのありかたを考えたりした。ただ、三田の家が企画の場であり、料理をつくり人々をもてなしながらも、企画をやる場になっているのではないかという問題意思があったのだ。

三田の家でなにかをやることに、目的はないということ、正確には、無目的が三田の家の目的であるという一見矛盾したことを決めたのが後期の初めだった。来ても来なくてもいいし、企画についても詳細をきめずに、ぶっつけ本番に近い状態で確かめてみる。三田の家が私達にとってどういう存在であるべきなのかという根本的な疑問にこたえ、なんとなくたのしいを無意識のうちで感じる、目的はなく、そこにいることに意味があり、参加者に対しては企画というような制約はなるべくかけないようにする三田の家に変えようとした。

結果としてどうなったか、というのは議論の余地があるが、ひととき班では、無目的の目的化を体現しようと、なにも企画せずに、三田の家に集まりその場を楽しむということに焦点をあて、人それぞれが自分の居心地のいい家の中の居場所に、思い思いのやり方で過ごし、三田の家を再確認することが出来たし、協働をテーマにした班では、共同するそのプロセスに焦点をあて、目的を必要としない協働のあり方をさぐり、班ごとに料理をつくった。ある参加者は、コンロと行き場を失って、三田の家の外に出たりした。Something Newではなにかがあたらしく、新しくはないのかもしれない、何かをさがして、何も起きないかもしれない企画もまたよしとする、三田の家の空間に身を委ねる企画へとシフトしていった。

特に５期の間では、三田の家の存在が変わっていたのは、確かである。義務感でいく三田の家から、みんながいるなら、あの居心地の良い場所へ、いこうという気持ちがなぜだかおこっていた。もしかしたら、目的と結論にさらされる日常から、三田の家が一種の逃避の先である非日常に変わったのかもしれない。人々のつながりを確認出来る場所になり、三田の家に行きたいという感情を持てるようになったのだ。

前期、後期、それぞれにいいところ、悪いところがあったと思うのだが、それらをすべて飲み込んで、今年、三田の家はなくなることになった。今年はどんな三田の家になるのだろうか。

2012/06/12
～Our lives～ 生きたいように生きれてる？

過去の人々が思い描いてた今、今を生きる私達が描く未来、そしてそれらが交錯する現在…

ハイテクな視点、スローな視点から私達が何気なく送っている現在を見直し、よりよく生きる術を探ります。

ゲスト
飛騨の農家でスローライフを実践する美少女にスローライフの醍醐味について語ってもらいます。

持ち物
便箋、封筒。
タイムカプセルをするので封筒のサイズにはいる位の思い出の品。いれたいもの。
日時：6月12日（火）18時15分頃開始～20時30分頃まで
軽食がでます。

2012/05/29
スロー&ハイテクNight！

ｉＰｈｏｎｅ，ＳＮＳ，Ｔｗｉｔｔｅｒ．．．
当たり前のように組み込まれたハイテクノロジー
四季の変化を感じる五感や、人と人直接のコミュニケーションなど
昔ながらのスローな生活
ハイ&スロー
どちらも私たちの生活に必要不可欠。
そんなハイテクライフ、スローライフを見つめ直し、
よりよい生活を送る手掛かりにしませんか？
5月29日(火)
18時15分～20時30分
予約不要
費用：お食事代
持ち物：なし
◇内容
１、スローな生活、ハイテクな生活とは？
２、ＨＡＮＩＷＡ In The Dark
３、スロー&ハイテク カレー食べ比べ
４、〇〇からこんにちは、ハイテクskypeコミュニケーション
（ゲスト：塩原ゼミ４期重田＠世界一周中）
５、まとめ
盛りだくさんの内容でお届けします。
ぜひお気軽に足を運んでくださいませ。

2012/06/19
こんばんは。

今回は、三田のまちをつなぐ地図『三田の師範』です。
コンセプトは、「三田の家を通じて学生や地域の方々がもっと三田のまちについて知ってくれたらいいな」というもの。
商店街を紹介する地図を手作りして、三田の家に掲載します！

WSでは、商店街をめぐって地域の人とふれあいながら、お店の直筆紹介文を書いてきてもらいますっ!!
そして、それを持ち寄って、皆さんの手で地図を作り上げましょう。

時間は、お店の方の都合もあるので少し早めに始めようと思っています。
スケジュールとしては、

◇6月19日(火)◇
予約不要
持ち物なし
費用はお食事代と気持ち！

17:45～18:00　WS説明
18:00～19:00　商店街めぐり
19:00　　帰還 to 三田の家
19:00～20:00　地図作成 with　ご飯♡

みたいな感じになると思います!!

なかなか知ってるようで知らない三田商店街。
もっともっと地域がつながっていったらと思います。
お時間が合わない方は、次週の26日(火)にも同様のWSを行いますので、そちらもぜひ。

ご興味のある方、ぜひいらっしゃいませ。
お待ちしております。

さみしがりやのプラットフォーム

次世代の三田を想像したりするっ

10月30日は「ひととき」の日
11月6日は「協働」の日
12月4日は「Something New」の日

慶應義塾大学法学部政治学科塩原良和研究会の有志が、
「Something New」をテーマに三田の家で何かをします。

いや、むしろ何も起きないかもしれないのですが。

とりあえず、三田の家に来れば、大学生が何人か「Something New」なことをしているはずです。

いっしょに「Something New」を楽しんでみませんか？

日時：12月4日（火）18時30分～20時30分頃終了予定

場所：三田の家

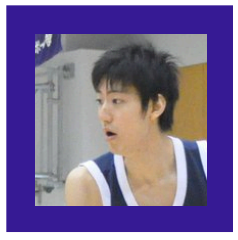
軽食がでます（実費＋若干のカンパをあわせて数百円）

どなたでもお気軽にお越しください。

Epilogue

終わりは次のはじまり。

-村上春樹「ねじまき島のクロニクル」より

4th  Katsura Ryuma

Friends Projectで与えられたもの：理想の夜

桂　竜馬

私は最近、塩原先生がこわい。

もちろん塩原先生に何も非はない。先生は何も悪くなくて、自分の中での変化や気づきによって生まれた感情だ。

このゼミに入ることができたことに私は本当に感謝している。今までに無い視点でものを考えたり、今まで形の無いまま胸の中を漂っていた得体の知れないもののシルエットが少しずつ見えてきたり。こういう人でありたいなーと感じたり、こういう人にはなりたくないなーと胸に留めたり。「対話」とはなにか、「共生」とはなにかについて考えながら、ゼミ生や先生と関わったり、フィールドワークを通じて外国につながる子供たちと関わったりしてきた中で、これからの人生で多様な人と関わりながら生きていく上でどういう人間でありたいか、なんとなくだが自分の中に向かうべき方向性が見えたような気がした。

しかし、そういう命題について考えれば考えるほど、自分の至らなさが露呈してくる。今まで気づかずにいた自分の弱さに気付き始める。相手のことを考えきれずにしてしまった行動や、故意ではなくても相手を傷つけてしまうような言動。目指す人間像が少しずつはっきりしてきたからこそ、そこから逸脱する自分の行動や性格の一部分に気づく機会が多くなり始めた。そういった気づきを得る度に私の頭には塩原先生の顔が浮かぶ。「先生に学んだこと、このゼミで学んだことを、無碍にするようなことは絶対にしたくない」と。

ましてや4月から私が働き始める環境は、このゼミの思考とは真逆のような場所。私利私欲が渦巻く業界で、寝る暇もなく仕事に追いかけられ続ければ、私の中にある大事にしているものが少しずつ風化されていってしまうのではないだろうか……

巷ではこのゼミを「塩教」と呼ぶ者もいるらしいが、捉え方によっては私にとっては本当にそのくらい思考に影響を与える者になった気がする。クリスチャンにとってのキリストは、悪事を働かないための自制装置としての一面を持っていると思うが、私はなにか自分の行動や思考について考える時、先生やこのゼミのことを思い出すことが多々ある。それは本人たちがそのままの姿でそこにいるわけでは必ずしもなくて、私が自分の中に無意識のうちに創り出した象徴的な道標なのかもしれない。どんな環境でも、どんなに年月を経ても、このゼミで学んだことの一端を常に自分の胸の中に保っておきたい。

最後に私の夢をひとつ述べて終わりたい。4月から資本主義の典型のような場所で働くが、そこでしっかり結果を残すような人間になり、なおかつ、OB会で何年後かにもう一度先生にお会いした時に、呆れた苦笑いで「変わらないなー」と言われるような人間に、私はなりたい。

編集後記

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

まず、このような時期にFP報告書がまとめおわることになってすいません。就活の関係でした。

次回、があるとは思えないので、後輩が僕の経験をいかしてくれればうれしいです。

ちゃんとした就活を早く始めるべきということですね。

（去年の師範にひきつづいてしまったので、FPの編者にジンクスをつくってしまったかも）

編集に類似したことをやって失敗したこと数知れず。

今回は伝統だとか、みんなの思いだとかなかなか強く。

どこを切り、どこを切らざるべきか。

去年書いてあったものをばっさり削ることは勇気が必要でした。

顔が見えるFPにすることと、10年後振り返って何かを感じれる報告書にすることを目指しました。

卒業してしまい、社会人１年目を楽しんでいそうな４期の先輩。

就活を終えて、社会人ライフに怯えている５期の同期。

なにがなんだかわからず、もがいている６期の後輩。

塩原ゼミを作ってくださった、先輩方。

ここまで読んでくださった、思慮深く、心の広い読者の皆様。

なによりも、ワガママ、課題の提出遅れ、お酒での無礼、その他もろもろの失礼極まりない行動、言動にもかかわらず、塩原ゼミをやさしく見守ってくれている先生に感謝を申し上げます。

ありがとうございました。

あー。ずっとこのまま、みんなといっしょに大学生をつづけたい。

編者

Juice
NEVADA